

もし、家庭教師が二人
だったら、どうなるの
か？

左白

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校二年上杉風太郎のもとに好条件の家庭教師アルバイトの話を妹からされる。

一人だと思っていた風太郎だが……………

まさかの『落第寸前』五人の美少女の家庭教師をすることに……………

斎藤悠真は『親友』である風太郎から家庭教師アルバイトのことを話される。

そして何日か経った時、

風太郎から話されたことと同じ内容を五人の美少女の『父親』から話され、

全く同じ内容、条件で家庭教師をしてほしいと言われるのだが……………

『赤点』回避をすることはできるのか……………

そしてなんとか五人の美少女を卒業まで導けるのか……

二次創作なので結末も少し変えようかなと思っ
ています。
不定期更新ですがよろしくおねがいます。

2022年4月27日

全然案が浮かばない。

物語が続かない過去編早すぎた気がする。

もしかしたら過去編のみ削除するかも……

取り敢えず、案が浮かぶまでは凍結します。

また再開したら教えます。

2022年5月17日

過去編消します。

まだ、早すぎた。

目次

第1章 く家庭教師までの道のりく

第1話 全てはここから始まる!!

1

第2話 転校生はまさかの五つ子!?

10

第3話 家庭教師 ————— 21

第4話 屋上の告白 ————— 35

第5話 問題は山積み!! ————— 48

第6話 五つ子裁判!! ————— 64

第7話 今日はお休み ————— 77

第1章 く家庭教師までの道のりく
第1話 全てはここから始まる!!

「新郎様、新婦様の準備が整いましたよ」

「行こうぜ。風太郎」

「嗚呼、そうだな悠真」

《夢を見ていた。》

君と出会った高校二年の日、あの夢のような日の夢を……………》

7年前……………

旭高校学食にて……………

「焼き肉定食焼き肉抜きで」

「はいよ。ちよつとまってるな」

「おい、風太郎またこれ食うのか？」

「嗚呼。そうだ」

周りの皆は、は？何？あいつって言う感じで風太郎を見ている。

《この学食では焼き肉定食（400）円だ。

だが…しかし、焼き肉皿（200円）を引くと同じ値段で味噌汁とお新香が付くそして、安くて旨い。》

《そしてなんとと言っても学食では、水は飲み放題だしな……………》

《学食最高!!!》

!!!

べしや……………

誰かがぶつかってきて、水が顔にかかった。

「おい、大丈夫か、風太郎」

「あ。嗚呼」

「あ。ワリ」

「……………」

《やっぱ学食最悪……………》

「上杉君また悠真君と一緒にだぜ。やべえ」

「え〜〜。悠真君いつも一緒に可哀想……………」

「《親友》という素晴らしさを知らない奴らめ」

「風太郎らしいぜ。全く……………」

そして開いていた席につこうとしたその時……………

《ガシャ》

「え?」

「あ……………」

誰だ?うちの制服じゃない……………

ま。いつか。

座ろうとした時……………

「おい。風太郎ちよつと待てよ」

「あ。あの……!!」

「私のほうが先でした。隣が空いています。移ってください」

「ここは毎日俺らが座ってるんだ、あんたが移れ!!」と風太郎。

「関係ありません。早いものがちです」

「確かにそうだな。移るぞ風太郎」

「じゃあ、俺のほうが先に座りました。俺の勝ち!そしてここは俺らの席く!!」

《大人気ない……》と心のなかで思った悠真。

「ちよ………」

「!？」

座り始めたある少女。

「ちよ……そこ悠真の席………」

「椅子は空いていました!午前中に見て回ったせいで足が限界なんです」

「悠真………」

「そこのお嬢ちゃん、隣良いかな?」

「はい……良いですよあなたなら」

「上杉君達女子と飯食ってるぜ」

「や、やべえ」

「ちっあいつら……」と風太郎。

その少女は顔を赤らめている。

「ふっ。勝手にすれば……」と風太郎。

「!?」

《(250円)のうどん、トッピングに(150円)の海老天×2(100円)のイカ天、かしわ天、さつまいも天、そして、デザートに(150円)のプリン》

《昼食に千円以上とかセレブかよ……》

「行儀が悪いですよ。ご飯たべてる時に勉強は……」

「……………」

「テストの復習してるんだ。ほっといてくれ……」

「食事中にまで勉強なんて、よほど追い込まれてるんですね。何点だったんですか?」

「あ、おい!見るな」

「名前は上杉風太郎君……得点は……………100点!!」

「あーめっちゃ恥ずかしい」

“ムッ”

「わざと見せましたね」

「なんのこともだか……」

「こいつは、学年一位で尚休み時間にまで勉強してる勉強馬鹿だ。まあ、俺は、学年三位であいつには敵わないがな……あいつみたいにはできない」と悠真。

「三位でもすごいですよ。うう。勉強は得意じゃないので羨ましいです」
「そうです。良いこと思いつきました。折角相席になったんです」

「勉強教えてくださいよ!!」

「ごちそうさまでした」

「ええ!!食べるの早……」

「おい、風太郎もう行くのか?勉強教えてあげないのか?」と悠真。

「俺は、無駄なことほしくない主義なんだ。なんか報酬があれば別だが?」

「おい……」

「お昼ごはん少し分けましようか?お腹空いていませんか?」

「満腹だ……むしろあんたが頼みすぎなんだよ。太るぞ……」

「ふ、ふとつ!!」

プルルル。

《上杉らしいは》

Re :

《今日も悠真君とご飯食べてる？》

「食べ終わって時間が有ればTELしてください」

「あなたみたいな無神経な人初めてです。もう何もあげません」

「大丈夫か？」と悠真。

「あなたも早く行つたらどうですか？」

「いや……………ほっとけねーよ。まだ時間あるか？」

「ええ。まあ」

「これから図書館に来てくれるか？時間大丈夫？」

「ええ。図書館でなにするんですか？」

「勉強だよ。風太郎の代わりに俺が勉強見てやる。君？名前は？」

「中野五月（ナカノ・イツキ）です。あなたは？」

「俺か？俺は斎藤悠真（サイトウ・ユウマ）」

「じゃあ五月さん行こか」

「はい」

その頃風太郎はトイレで電話していた。……………

「もしもし……………」

「お兄ちゃん。お父さんから聞いた？」

「とりあえず落ち着け、何があった？」

「あ。ごめんね、うちの借金なくなるかもしれないよ」

「は？」

「お父さんがね。いいバイト見つけたんだ。最近近くに引っ越してきたお金持ちの子なんだけど。娘さんの家庭教師を探しているらしいんだ」

「それで？」

「アットホームで楽しい職場、相場の五倍の給料がもらえるんだって」

「裏の仕事にしか見えないんだが……………」

「成績悪くて困ってるって言ってたよ」

「でも、お兄ちゃんならできるって信じてる」

「ちよつと俺やるなんて……………」

「これでお腹いっぱい食べれるようになるね」

「で、その娘ってどんな奴なんだ？」

「午後から転校生来るらしいよ。あー中野って名前だった気がするよ」

「わかった。じゃあまたな」

「うん」

その頃図書館では、悠真と五月は一緒に勉強した。

そして予鈴がなった。

「じゃあ俺はクラスに行くわ……………」

「はい。じゃあまた後で……………」

「後で?」

変なこと言うなと思った悠真。

その後クラスに向かった悠真。

チャイムがなり、先生が教室に入ってきた。

「席につけ〜転校生を紹介する」

周りの子供達は……………

「転校生だつて?誰?誰?」

「入ってこーい」

ガラガラガラ、ドアが開いた。

「中野五月（ナカノ・イツキ）です。どうぞよろしくおねがいます」

次回 第2話 転校生はまさかの五つ子!?

第2話 転校生はまさかの五つ子!?

チャイムがなり、先生が教室に入ってきた。

「席につけ〜転校生を紹介する」

周りの子達は……………

「転校生だつて? 誰? 誰?」

「入ってこーい」

ガラガラガラ、ドアが開いた。

「中野五月（ナカノ・イツキ）です。どうぞよろしくおねがいします」

第2話 転校生はまさかの五つ子!?

「え?」と風太郎。

生徒たちはガヤガヤ喋りだした。

「女子だ……」

「普通に可愛い」

「あの制服って黒薔薇女子じゃない？」

「おいおい。まさか……。超金持ちじゃん」

「何者なんだ？」

《まさか。この人知ってる!!》

《転校生でお金持ち……。まさか俺はあの娘の家庭教師をするのか!!》

そして五月は自分の席に向かって歩いた。

「……どーも」

《 Pruitt 》とそっぽを向いた。

《ま、まずい……》

五月の席は悠真の席の後ろだった。

「あ、悠真さん先程は有難う御座いました」

「あ、嗚呼。こうゆうことだったのか。『また後で』って」

「はい。これから色々お願いしますね」

「嗚呼。よろしく」

周りの子は驚いている。なぜなら悠真が風太郎以外の子と喋っているからである。

『翌日』

またも、学食で焼き肉定食焼き肉抜きを頼んだ風太郎。

風太郎は一人だった。そこで風太郎は五月を見つけた。

《あ、居た》

《あの転校生に拒否されたら家庭教師の仕事が無くなってしまう。

なんとか機嫌をとっておかないと………》

「おまたせしました。悠真さん。そして皆さん」

「もくもく遅いよく」つとりボンの少女。

「ん？悠真、そして友達と食べてる………」

「すみません。席は埋まっていますよ」

「てか、悠真、何故そこに………」

「あ？すまん風太郎。あれから五月ちゃんとは仲良くなつてな。今日他の子と一緒に食べるって言つてたんだ、そして今日俺のことを一緒に食べる子に紹介したいと言うから一緒に来たんだ」

放心状態のまま風太郎は席を探しに行った。

「あれ？行っちゃうの？」五月と一緒にいた子が声をかけてきた。

「そりやまあ」

「席探してたんでしょ？私達と一緒に食べようよ」

「食えるか……………」

「でも君の友達は食べてるけど……………」

「俺と悠真は違うさ……………」

「はは、確かにそうだね」

「てなわけで、じゃあな。俺は五月って娘に用があるんだ。でも、今は良いや後でで」

「五月ちゃんが狙いなんですよ？」

「狙ってるわけじゃ……………」

「え!?!ほんとに五月ちゃんなんだ！今から呼んできてあげるよ」

「待て。余計なお世話だ、自分でなんとかできる」

「ガリ勉君のくせに男らしいこと言うじゃん」

「あ、でも困ったらこの一花お姉さんに相談するんだぞ。なんか面白そうだし」

「お姉さんって同級生だろ多分……………」

《しかし、どうしたものか……………昨日言ったことを根に持っている。

余計なことと言うんじゃないかった……………顔合わせは今日の放課後、

時間がない……………》

「上杉さん、うーえーすーぎーさん」

「ん？」

「やつとこつち見た。」

「ところでなんで俺の名前を？」

「それはですね……………」

「私上杉さんの忘れ物を届けに来たんです。あなたが落としたのはこの1000点のテストですか？それとも0点のテストですか？」

《《いつの間に……………》》

「右……………」

「わお。正直者ですね。両方セットで差し上げます」

「いらねえよ。てか……………0点のテストって誰のだよ……………0点のテストなんて初めてみたわ」

「私のものです」

「よく差し上げる気になったな!!」

「それにしてもガリ勉君ですね。1000点のテストなんて凄いです」

「俺は今お前が0点をとったことに驚いているよ」

「上杉さんの第一印象は、『根暗』で『友達一人しか居なさそう』でしたが、

新たに『天才』を加えておきますね」

「全然嬉しくない……因みに俺はテストは学年一位だが、お前と一緒に居た悠真は、学年三位だ」

「わああ。凄いです」

「流石陰キャ同士ですね」

「一言余分な気がするっていつまでついてくるの?」

「まだお礼を言われていません。天才なのに『ありがとう』も言えないんですか?」

《イラ》

バン……………風太郎は紙を見せてきた。

「え? 私の…………」

「たまたま拾った。これで貸し借りなしだな」

「……………」

『そっか。有難うございます!!』

「お礼言っちゃったよ」

「お前あの中野五月と仲いいんだろ?俺が謝っていたって伝えてくれないか?」

「駄目ですよ。上杉さん。そういうことは本人に言わないと」
「……………」

《放課後》

《帰りになれば一人になってくれると思つたのに…………》

さっきの五人は一緒に帰ってきた。そこに……………

「おまたせ……」と悠真。

「悠真さんお疲れさまです。遅いですよ……」と五月。

《!?いつの間にか悠真あの子達と仲良くなつて、悠真…………》

「五月これで何個目？」と二乃。

「そうですか？まだ二個目ですが……………」

《謝るタイミングがねえ…………》

「この肉まんおぼけ……男にモテねーぞ」

「やめてください。悠真さんがいるのですから」

「ねえ。悠真。あんた。これから家来る？」と二乃。

「嗚呼、一緒に人生ゲームでもしようぜ」

「あればね……」

ある一人ヘッドホンの女の子が風太郎のところに歩いてきた。

「ねえ。一人で楽しい?」

「嗚呼。わりとこうゆうのが趣味なんだ」

「女子高生を眺める趣味……………予備軍……………」

「……………」

「それと無言で通報するのやめて」

「あと友達の五月ちゃんには言うなよ」

「わかった。でもあの子は……………友達じゃない」

《仲良く見えるんだけどな……………人付き合いつて面倒くせ》

風太郎は少し後を付けながら、悠真達を追った。

《ここが、五月の……………家じゃねーよな。マジもんの金持ちじゃん》

「ねえ。何?君。ストーカー?」

「あ。風太郎じゃねーか。何しにきたんだ?」

「え?いやあ……………」

「お前たちじゃ話にならんどいてくれ」

『しつこい。君モテないっしょ。早く帰れよ』
「……」

風太郎は走り出した。マンションに……

「あ。警備員さん」

《くそ。なんでこんな事になった》

「あ。五月」

チーン。エレベーターの扉閉まった。

「くそ」

『うおおおおおおおお』

《全部あいつらのせいだ》

《学校帰りに汗かいて走っているのも全部あいつらが》

階段を駆け上がっていった。遂に辿り着いた。

「なんなんですか？ 私に御用ですか？」

「昨日は悪かった」

「？聞こえないです。用がないならこれで」

「わー。待て」

「なにがしたいのですか？あなたは。私は家庭教師の先生がこれから来てくださるの

で」

「それ、俺……。家庭教師俺」

《《ガーン》》

「そんな……。無理。こんな人が私達の家庭教師なんて」

そう言つて座り込む五月

「ん？私達？」

ちようどその時エレベーターの扉が開いた。

そこには……

「あれ？優等生君。五月ちゃんは何してるの？」

「イタツ。こいつがストーリーカーよ」

「二乃。早とちりしすぎ」

「ええ？上杉さんストーリーカーだったんですか？」

「お？風太郎お前も誘われてたのか」と悠真。

「は？なんでこいつらがここに……」

「住んでるからに決まつてるじゃないですか」

「へ、へえ。友達同士で仲良くシェアハウスか」

《《この時俺はあることを思った。これは夢だ。これは夢であると》》

「違います。私たち五つ子の姉妹です」

《俺はあの瞬間を大人になってからも夢に見る》
《とんでもない悪夢だ……》

第3話 2人の家庭教師

第3話 家庭教師

「あれ？優等生君。五月ちゃんと何してるの？」

「イタツ。こいつがストーカーよ」

「二乃。早とちりしすぎ」

「ええ？上杉さんストーカーだったんですか？」

「お？風太郎お前も誘われてたのか」と悠真。

「は？なんでこいつらがここに……」

「住んでるからに決まってるじゃないですか」

「へ、へえ。友達同士で仲良くシェアハウスか」

《この時俺はあることを思った。これは夢だ。これは夢であると》

「違います。私たち五つ子の姉妹です」

《俺はあの瞬間を大人になってからも夢に見る》

《とんでもない悪夢だ》

第3話 家庭教師

「今頃お兄ちゃん家庭教師頑張ってるかな？」

「今日は奮発しておかずに卵焼きでもつくっちゃお」

その頃中野家のマンションでは……

「そもそも、誰も集まって居ないってどうゆうことだ？」と風太郎。

「まあ、しゃあないんじゃないか？」と悠真。

「はあ……………」

そこに……

「はいはい。私が居ます」と四葉。

「お前は…………。0点の四葉だっけか？」

「はい。そうですよ」

「なんでお前は逃げないんだ？」と風太郎。

「心外です。上杉さんの授業を受けるために決まってるんじゃないですか」

「四葉…………抱きしめていいか？」

「さー。早く呼びに行きましよう」

「手前から、五月、私、三玖、二乃、一花の順番です」

「五人集めるから始めるとは……」

「大丈夫です。皆しつかりと協力してくれるはずですよ」

五月の部屋に向かった……

「クラス一緒ならわかると思いますが五月は五人の中でも真面目です。

よほどなにもない限り協力してくれますよ」

コンコンとノックした。しかし……

「嫌です!!」

「なっ、なんで……この前教えてほしいと言ってたじゃないか」

「ええ。確かに言いました、ですが、拒否したのはあなたでしょう」

「それを言われると……」

「そもそも何故、あなたなのですか。私はこの前しつかりと教えてくださった悠真さん

のほうがいいんですか……」

「そんなこと言ったって……」

「最後に言いますが、この町にはまともな家庭教師は居ないんでしょうか」

「お前に勉強を教えてやりたいんだ。少しでもやる気があるなら……」

「ないです。忘れてください。あなたからは教わりません」

「くっ」

そうしてドアを閉めた。

風太郎は三玖の部屋に向かった。

「三玖は、私達の中で頭が良いんです。上杉さんと気があるんじゃない？」

そうして三玖の部屋のドアを開けて入った。

「嫌!!」

「そもそもなぜあなたなの。この町にはまともな家庭教師……」

「さつきも聞いた、それ……」

「……………」

「二乃は人付き合いがうまいんです。上杉さんでもすぐに仲良くなれますよ」

ドアをノックした。

コンコンコンコンコンコン。

ドアを開けた。だが、

誰も居ない……

「そもそも部屋に居ないってどうゆうこと」

部屋を出た風太郎。

「やる気なくしてきた……」

「大丈夫です。後一花がいます。一花は……」

「なに……その間」

「驚かないでくださいね」

「一花の部屋は凄い汚かった。」

「ここに居るのか？」

「はい……」

「ふああ。おはよう。まさか、君が家庭教師するとはね。それで五月ちゃんのこと見てたわけだ」

「この部屋……。最後に勉強したのはいつのことだか……」

「勉強、勉強ってそれでいいの？」

「なんのことだ。それより居間に来い」

無理やり引っ張って行った。

「あーちよつとまって……。服着てないから照れる……」

「さっさと服着てくれ……。居間で待っている」

そうやって部屋の外に出た風太郎。

「ねえ。風太郎。私のジャージ知らない？」

「知らない……」

「風太郎が来る前まではあった」

《ひよつとして俺疑われてる!?!》

「ひよつとして盗つ……」

「てない」

そもそも何故、わかるとおかなく思つた風太郎。

「もつと探してみろよ」

「ある程度は探した、残るは……」

《冗談じゃない。この中を探したら日が暮れて家庭教師ができなくなる》

「はあ……」

「おーい、風太郎、お菓子できたらしいぞ、下に降りてこいよ」つと悠真。

「あ!!」

キツチンに立っていた二乃の着ているジャージを見た。

《中野三玖》

「あつたぞ、三玖」

「ホントだ、有難う風太郎」

下に降りた風太郎達は、リビングに来た。

そして……

「クッキー作りすぎちゃったから食べる?」

「え？いや〜」

「よし、気を取り直して家庭教師をするぞ」

『いただきまーす』

「おーい、話を聞いてくれ〜」

「ん。これ美味しいな」と悠真。

「わ〜嬉し〜い」

「風太郎も食いなよ。どんなことがあつたかは知らないがクッキー食べたら勉強してくれるかもよ」

「いや〜。まあとりあえず、食べるから小テストをしてくれ」

「はい、どーぞ」

もりもりクッキーを食べる風太郎。

「わ〜、いっぱい食べてくれる。嬉しい!!」

《こいつら……ほんと、どうしようもねえ……》

「あ。そうだ」

『パパとどんな約束したの?』

「いや〜、何も……」

「うそ〜、君そんなことするキャラじゃないでしょ」

『ぶつちやけ家庭教師なんていらなんだよね〜』

「クツ……」

「うそうそ、はい、お水」

「あ。嗚呼」

風太郎はお水を飲んだ。

「バイバイ」

「んあ？」

ある、タクシーの中。

「お客さん、起きてください、着きましたよ」

「へっ(こどい)」

「どこっってお客さんのお家ですよね」

「何故……」

風太郎はわけが分からなかった。

「お乗りになる前から寝てましたね」

「あのやろ〜。ここまでしやがって」

「料金4800円になります」

「え？高、そんな金……」

「カードで」

「まいど!!」

「い、五月」

タクシーを降りた五月と風太郎。

その後ろにまたタクシーが止まる。

そこから降りてくたのは……

「悠真……。何故？」

「おまえが心配で見に来たんだよ」

「でも。お前、金……」

「大丈夫だ、一花からカードをもらった。それで来た」

話しているとそこに……

「あく〜お兄ちゃんだ。それに悠真にそしてその人は生徒さん？」

「関係ない人だ、帰るぞ、らいは」

「う、嘘だ〜。そうだ、ご飯家で食べていきませんか？」

「え？」

『だめ？ですか？』

風太郎の家に入った、五月と悠真。

「はっはっは。まさか風太郎が女の子を家に連れてくるとわな」と勇也。

「親父……」

上杉家特製のカレーを食べている五月と悠真。

「お？この牛乳消費期限が一週間前じゃねーか。危うく飲めなくなるところだったぜ」

「おい……」

「お父さんお久し振りです」

「お、悠真、風太郎といつも仲良くしてくれてありがとな」

「はい」

「これからも仲良くしてやってくれ」

「ここぞでらいはが口を開いた。

「お兄ちゃん達家庭教師頑張ってきた？」

「あ。嗚呼。バッチグーよ。なあ五月」

「え、ええ」

「良かった、ちゃんとしてくれていて」

「……」

じーつと睨まれた風太郎。

「あ。アハハハ」

「これで借金問題も解決だね」

「こら、らいは、お客さんの前だぞ」

「あ…。ごめん」

「……」と五月。

「おい。風太郎五月ちゃんを通りまで送ってやんな」

「あ。嗚呼。悠真は？」

「俺は、今日はお前の家に泊まらせてもらおうわ」

「んな。勝手に……」

「お。良いぞ」

「親父……」

風太郎は五月を連れて歩いている。

「あなたの家に借金問題があっただなんて……」

「気にするな。こつちの問題だ」

「はい……」

「勉強はしますが教えは乞いません」

「あなたの手を借りずともやり遂げて見せます」

「そうか。それで良いのか。五月サイコー!!」

「??」

「そうか、条件は全員の卒業なんだ。良いアイディアがある」

「何をするつもりですか？」

「それは明日分かる。他の四人を集めておいてくれ」

「なにをするかわかりませんが了解しました。伝えておきます」

上杉の家では。斎藤悠真のスマホに着信があった。

プルルルルル。

「悠真さん、電話ですよ〜〜〜」とらいは。

「あ。嗚呼。ちよつと外行つてくる」

外に出てスマホを確認した。

「ん？親父。親父が何故……」

「ご無沙汰してるね。悠真君」

「今更何の用事ですか？」

「上杉君から家庭教師の話は聞いてるだろう？」

「さつき知りました」

「その家庭教師の件だが、君にも頼みたいと思つてね」

「それは……。家庭教師が二人いるということになりますか？」

「嗚呼。そうゆうことだ。上杉君と二人三脚で頑張つてくれ。」

娘達を卒業まで導いてくれ。君達は義姉弟でもあるのだからな」

「義姉弟なんですか？」

「嗚呼。話せば長くなる、また今度詳しく伝える」

「わかりました」

「上杉君と娘達には私から伝えておくよ」

「お父さんまた今度家に帰つて来れますか？」

「ああ。時間が有れば家族水入らずで話そう」

「はい。それでは失礼します」

「嗚呼。また今度話そうな悠真」

第四話 屋上の告白

第4話 屋上の告白

「上杉君と娘達には私から伝えておくよ」

「お父さんまた今度家に帰って来れますか？」

「ああ。時間が有れば家族水入らずで話そう」

「はい。それでは失礼します」

「嗚呼。また今度話そうな悠真」

第4話 屋上の告白

「よく集まってくれた。昨日の悪行は心優しい俺が許すとしよう。」

「今日はよく集まってくれた」

「いや〜！集まったってここ自分の家ですけど」

「まだ諦めてなかったんだ…」

「……………」

「ねえ。早くしてくれる？今日遊ぶ約束してるんだけど」

「家庭教師は要らないって言わなかったっけ？」

「ならそれを証明してくれ」

「え？証明？」

「昨日出来なかったテストだ。」

合格ラインを超えたやつには金輪際近づかないと約束しよう」

『勝手に卒業していつてくれ』

《馬鹿正直に五人全員を相手にする必要はない!!》

《赤点候補のやつのみを教えてやれば良いんだ》

「なんで私達がそんなことしなきゃ……」

「わかりました、受けましょう」

「は？あんた本気？」

「合格すれば良いんです。これであなたの顔を見なくてすみませう」

「合格ラインは？」

「60いや……50点あれば良い」

「わかった」

「はあ……。別に受ける義理はないんだけど」

『あまり私達を侮らないでよね』

こうして、二乃達は小テストを始めた。
カチカチカチ。

「採点終わったぞ。凄え100点だ」

『全員合わせてな……』

中野一花12点。

中野二乃20点。

中野三玖32点。

中野四葉8点。

中野五月28点。

「お前らまさか……」

「逃げろ!!」

「あ!おい」

逃げ出した、だが……。そこには悠真がいた。

「ちよつと待ったあ〜」と悠真。

「悠真、あんたなんでここに……」と二乃。

「ふっ。お前らがテストしている時に二階に隠れたんだよ」

「せ、せいわよ」

「さあ。戻って勉強するぞ。もお、逃げ場はねえぞ」

五つ子達は、さつきまで居たテーブルに戻った。

そうすると風太郎はプリントを出した。

「さあ。今日はこのプリントを終わらせるまで付き合ってもらおうぞ」

「はあくく。わかったわよ。終わらせれば良いんでしょ」

「そのやる気を大切にしろよ」

五つ子達はプリントを解き始めた。

悠真は風太郎と話した。

「皆頑張ってるな、少し、飲み物を買に行ってくるわ」

「分かった」

マンションの近くにあった自動販売機で飲み物を7個買った悠真。

そして、部屋に戻った。

「おかえり悠真」

「嗚呼、これお前の分の飲み物な」

「サンキュー。麦茶か」

「好きだろ？」

「嗚呼」

こうして喋っているうちに五つ子達はプリント終わったらしい。

「よし、答え合わせの前に、皆に飲み物を買ってきた」

「はい。一花はこのお茶、二乃には紅茶、三玖には抹茶ソーダ、四葉にはみかんジュース

五月には水な」

「有難うございます」

休憩を終えた五つ子達。

その後は今日やったプリントを終えて終了となった。

「今日のかてきようはここまで。今日やった小テストの復習も忘れずに」

翌日

はあ。ギリギリセーフ。

《こんなにも家庭教師と自分の勉強の両立が難しいとは……》

そこに、車が止まった。

「かつけー、100万円くらいはするだろう。(適當)」

「!!」

「お前らの車だったのか……」

「なにジロジロ見てるのよ」

そこにまたしても車が止まった。

その車の名前はポ○シエだった。

「お！風太郎おは〜」

「俺の周りには金持ちしか居ないのか……」

すると運転席から使用人と思われる人がでてきた。

「悠真様、カバンです。帰りはどうなされますか？」

「あ、カバンありがとう。風太郎達と家庭教師してから帰るから迎えは中野家まで頼む」
「わかりました。皆様にはまだ自己紹介してませんね。私の名前は、佐野由香(サノ・ユカ)。」

「大学1年生です。悠真様のお手伝いをしています。皆さんよろしくおねがいます」

「よろしくおねがいます」

「そろそろHRが始まる。」

「気をつけて行ってらっしゃい」

「わかりました」

「そう言えばお前昨日の勉強の復習はしたのか？」と風太郎。

「……………」と五つ子。

「問一、敵島の戦いで毛利元就が破った武将を答えよ」

「……………」

「無言……………」

教室へ向かう途中五つ子達、悠真は喋りながら登校していた。

《この2日間でわかったことが2つ》

《1つはあいっらは重度の勉強嫌い、そして俺のことも嫌っぽい》

《心の距離》

風太郎はノートを見た。

「なあ。悠真ちよつといいか？」

「嗚呼。なんだ？」

「これを見てくれ」

「この前のテストの結果か」

「嗚呼。よく見てくれ」

「ん？三玖のやつ、1問目のやつ合格してる」

「嗚呼。なんで答えなかったんだろ」

「さあ……」

なんで答ええないのか疑問に思いながら、昼休みになった。

風太郎は食堂に行った。そこで三玖と出会ったのだ。

「あ、三玖ちよつといいか？ 昨日のテストの1問目……」

「上杉さん朝は避けてしまつてすみませんでした。そして

今日やった問題全部間違えてました。アハハハ」

「四葉お前、俺、今喋つてただろ。中に割つて入るな。小学生でもそんなことくらい分かるぞ。」

るぞ。」

お前は小学生以下か」

「フータロー君そんなこと行つちや駄目だぞ」

「一花……。でも仕方ない、こういうやつは一番嫌なんだ」

「上杉さん……」

「三玖因みにそ飲みものはなんだ？」

「抹茶ソーダ……。意地悪するフータローには飲ませてあげない」

「意地悪つて……」

「そう言えばさ、勉強、勉強言つてないで高校生活楽しもうよ。恋とか」

「恋？それは学業から離れた行為だ。したいやつはすれば良い……」

だがそいつの人生のピークは学生時代になるだろう」

「この拗らせ方手遅れだわ」

「そうだな」

「悠真いつの間にいるんだ」

「んー。お前が恋について語りだしたところからな」

「……」

「三玖は好きな人とかいる？」

「!?いないよ」

「姉妹の私にはわかります。三玖は今恋してます」

「へえ〜。三玖が恋してるのか」

その後教室に戻った風太郎そして悠真。

悠真の机の中に手紙が入っていた。

「ん？何だこりゃ」

《ユウマに言いたいことがあるの。どうしてもこの気持ちが抑えられないの!》

「んー」

誰かに見られたら困ると思った悠真は机の中に手紙を入れた。

そして、放課後になった。

屋上では……。

「まだ来てないか。よし。今度やる日本史の勉強でもしとくか」

「もう。来てたんだ」

「嗚呼。それで話つていうのは？」

「みんなの前では言えなかつたんだけど……」

「ユウマあのね……。ずっと言いたかったの!!……す。……す」

『陶晴賢』

「陶晴賢!？」

「よし。言えた満足……」

「あー。問題の答えか？」

「うん。ユウマとフータローに言いたかつたんだ」

「俺、お前が社会好きだって言うことを知っているぞ」

「なんで？」

「お前のスマホの壁紙武田信玄のやつだろ」

「なんだ。知ってたんだ。」

「きっかけは、四葉から借りたゲーム、野心溢れる武将達に惹かれてたくさん本も読んだ」

「あ。嗚呼」

「でも。クラスみんなが好きなのはイケメン俳優や美人のモデル、それに比べて私は髭のおじさん。変だよな」

「そうなことない。自分の好きなものを信じろよ」

「ユウマ……」

「俺は隠していることがあるからお前に言う。俺は漫画やアニメ、ライトノベルなどが好きなオタクだ」

「そうなんだ。でも一つだけ約束して」

「ん？何だ？」

「私が武将好きだって言うことは誰にも言わないで」

「嗚呼。分かった」

悠真と三玖は、すぐのところにある自販機に向かった。

「はい！これ」

「ん？なにこれ？」

「抹茶ソーダ……嫌だった？」

「味が気になるからもうね」

「うん。これ上げるのは友好の印。勿論鼻水なんて入っていないなんちやって」

「あー。あれか。石田三成が大谷吉継の鼻水が入った茶を飲んだ話だろ？」

「ユウマは何でも知っているね。その通りだよ」

「っしやー。俺が解けない問題なんてない!!」

「張り切ってるね」

「嗚呼。三玖はこれからどうするんだ？」

「フータローも呼んだからフータローとも話してから帰るね」

「あ。嗚呼、でも、俺も待つよ」

「何で？」

「図書館で家庭教師するから。待ってるよ」

「分かった」

悠真は帰りの支度をして教室で勉強しながら待った。

そして悠真は勉強し終わったから二人が来るまで眠った。

次回
第5話
問題は山積み!!

第5話 問題は山積み!!

第5話 問題は山積み!!

「ユウマ起きて」

「うーん、あ？三玖か」

「うん」

「風太郎とは話おわたったのか？」

「うん。ユウマ今日も日本史教えてね!!」

「嗚呼」

風太郎は先に図書館へ向かうと言っていたらしい。

「さあ、俺らも向かうか」

「うん」

三玖と歩く廊下。

いつもの放課後の廊下は賑やかなのだが、
今日はやけに人が少なかった。

3階にある図書館の扉の前に着いたのだが・・・

「だ・か・ら何度言ったら分かるんだくくくく」

「ライスは、LじゃなくてR。お前シラミ食うのか？」

「あわわわ」

「四葉なんで怒られてるのにニコニコしてるんだ？」

「家庭教師でもないのに上杉さんに勉強教えてもらえることが嬉しくって」

ガラガラガラ。

扉が開いた。

「よお。風太郎」

「おつかれ。悠真」

「そこにいるのはまさか？」

「ああ、そのまさかだよ」

「三玖来てくれたんだな」

「うん、ユウマのせいで考えちゃった。」

私にも出来るんじゃないかって」

【責任取ってよね】

「任せろ」

「!?三玖が好きな人って悠真さんなんじゃ?」

「……………ないない」

数日経ったある日のこと・・・

風太郎は早く来ていたのだ。

「なんだ?これ。センサー反応しろ〜!!

五人だけではなく、お前まで俺の邪魔をするのかアア」

どうしても開かないドア。

開こうとしないドア。

防犯カメラがジーンと見てくる。

「あの一。30階の中野さんの家庭教師をしています。

上杉と申します。そのドア壊れてますよ?」

「何やってるんだ?お前」

「悠真か、丁度良かった此処のドア壊れててな」

「壊れてるわけないだろ」

「え?」

「此処の家オートロックだぞ?」

「今どきオートロック知らない人初めてみた」

「まあ。知ってたがな。三玖。悠真」

《スタートからやっちゃまったな》

《これから上手くやっついていけるんだろうか》

「何してるの？家庭教師するんでしょ？」

「嗚呼。行くか、風太郎」

「そうだな」

部屋に着いた風太郎、悠真、三玖。

「おはよう御座います〜〜」

「おはよ」

「おはようさん」

「私はもう準備万端です」

「私を見てよーかな」

「私は此処で自習しているので気にしないでください」

今日は良いじゃないか。

こいつらだつて優しく接すれば理解しあえるんだ。

「よーし、やるか」

「なーに。また懲りずにきたの？」

「二乃もするか?」

「死んでもお断り。」

まあ。悠真君なら大歓迎よ」

「なんで俺歓迎されちゃってるの?」

「前みたいに寝てしまわなければいいけど」

「あれは、テメエが・・・」

《おつといけない。優しく、優しく》

「今日は俺らだけでやるか」

「はーい」

「……………」

「そうだ、四葉。バスケット部の知り合いが

大会の臨時メンバーを探してるんだって〜

あんた運動出来るし行ってあげたら?」

「え?今から?でも上杉さんの授業が」

「二乃、俺が勉強をみてやる」

「え?」

「だから、他の子の迷惑になるようなことはやめろ」

「なら、良いわ。良かったわね、悠真君に助けられて」

「あれ？四葉は？」

「行っちゃったみたい」

「はあ・・・」

「しやーない、残りの人達だけでやりますか？」

「うん。そうだね」

無事、始まった勉強会のハズが・・・

数時間経った後、二乃が俺に聞いてきた。

「ねえ、所でご飯食べてきた？」

「いや？まだだが」

「じゃあさ、作ってあげる」

「いや、勉強は？」

「後でも良いでしょ？」

「分かった」

二乃は部屋から出ていき、俺も後に続いた。

そして、階段を降りた二乃と俺。

「三玖、あんたも料理しなさい？」

「え？なんで？私」

「この冴えない顔の男が好みだったの？」

「なんか今、ひどいことを言ったな」

「二乃はメンクイだから」

「お前も地味にひどいな」

「はあ？メンクイ好きだから何？」

イケメンに越したことはないでしょ？」

「だったら、料理対決でもしようじゃない？」

「りよ、料理ですか？」と五月。

「どちらがより家庭的か私が勝ったら今日は勉強は無し」

「そんなの、やるわけないよな？」

「フータローすぐ終わるから待ってて」

「お前が座ってろ」

《ことごとくうまくいかない・・・》

「じゃーん、旬の野菜と生ハムのダッチベイビー」

「オ……オムライス」

「やっぱ良い、自分で食べる」

「せっかくだし食べてもらいなよろ」

「はい。これは悠真君の分」

「ありがとな。二乃」

風太郎が一口ずつ食べる。

「うん、普通に美味しいな」(貧乏舌)

「はあ？そんなわけ。悠真君は私のどうだった？」

「最高だった」

「そ。そう。嬉しいわ」

「はあ、今日は遅くなって待った。また出直すわ」

「うん。今日はごめんね」

「あいつと分かり会える日は来るのだろうか」

「ちゃんと誠実に向き合えば分かってくれるよ」

「いやよ。こいつとなんか」

「じゃあ、何故ユウマなら良いの？」

「そ、それは・・・」

昔会ってたなんて言えないよ・・・

私がどれだけ悠真のことを好きなのかも。

1回会ってるんだよ？私達。

ちよつとの時間だったけど。

私達会ってるんだよ？

「な、なんでも良いじゃない」

「そう」

「じゃあな三玖」

「じゃあねフータロー、ユウマ」

「じゃあね悠真君」

「嗚呼、じゃあな二乃」

エレベーターに乗って降りる二人。

「なあ、何故お前にだけは優しいんだ？あいつ」

「そんなこと言われてもな。わからん」

「あ。財布忘れた」

「待つてよか？風太郎」

「先に行つててくれ」

「分かった」

先に行くことにした悠真。

ガチャン。

《オートロックつてめんどくせ〜》

《ややこしい二乃なら出んなよ》

「忘れ物？シャワー浴びてるから勝手に取つていいよ」

「それで良いのか？三玖」

「まあ、行くか」

30階へ向かった風太郎。

そして、部屋に入った。

「み、三玖、もう風呂出たのかよ」

《そいえばこいつ全然気にしないやつだったな》

《さつさと取って帰ろう》

「誰？三玖？」

「風呂入るんじゃないの？風呂空いたけど」

《まさかの二乃》

《1番会いたくない人》

「いつもの棚にコンタクト入ってるから取ってくれない？」

《此処は逃げるべき》

「まだ怒ってるの？」

「全部あいつのせいだ」

「パパに命令されたからって好き勝手家に入ってきて・・・」

「私達5人の家にあいつの入る余地なんてないんだから」

《こいつもしかして》

「決めた今度からフータローは出入り禁止」

《すまん出るのだけは許してくれ》

その途端本が落ちてくることに気づいた風太郎。

「あ。危なっ」

バタバタ

「え? えええ」

「この時の俺はまだ理解していなかった

「今日もありがとうございました」

「一花ちゃん今日も最高だったよ。また次も宜しく」

「はい」

「この馬鹿五人組の1人1人と

向き合うことの難しさを・・・

「中野さん上手で頼もしいよ〜〜」

「お役に立って嬉しいです。次の試合も頑張りましょう」

「あのさ。お願いがあるんだけど」

「え?」

そして、俺も教わることとなる。

《こう言う冴えない男が好みだったの？》

「変なこと言うから。そう言うんじゃないのに・・・」

俺もまた馬鹿野郎だということをし！

「不法侵入！」

「違う、俺は取りに来ただけだ」

「と。撮るって何を？」

カシヤ

スマホのシャッター音が聞こえた。

「あ・・・」

【最低です】

「由香さんちよつと待っていてくれないか？」

「え？何故ですか？」

「何か嫌な予感がしてな」

「分かりました、私も悠真様のお父様から

中野さんの家のオートロックの番号教えてもらってるので

先に行つててください」

「え？分かりました」

次回 第6話 五つ子裁判

第6話 五つ子裁判!!

第6話 五つ子裁判!!

由香さんと離れた俺は急ぎ足で

中野家の家に向かった。

「よし、着いた〜」

そう、俺は中野家の一員だ。

だから、鍵も親父から渡されているのだ。

「失礼するぞ」

鍵を開けて部屋に入る。

すると既に・・・

「裁判長。御覧ください」

「被告は家庭教師という立場にありながら

ピチピチ女子高生を目の前に欲望を爆発させてしまった」

「この写真は上杉被告で間違いありませんね」

「え。冤罪だ」

「なんだ？この状況

四葉はバスケット部のお手伝いの為欠席中。

「裁判長」

「はい。原告の二乃君」

「この男は一度マンションから出たと見せかけて

私の風呂上がりを待っていました。

悪質極まりない犯行に我々はいいつの

今後の出入り禁止を要求します」

「お。おいそれはいくらなんでも・・・」

「大変けしからんですなあ」

「おい。それは流石に酷すぎじゃないか？」

「え？」

「なんで此処に悠真君がいるの？」

「そのことは今どうでも良い」

「この状況完全に積んだな、風太郎。」

でもこの状況覆す方法は必ずある。

「風太郎はどうなんだ？ 本当にやったのか？」

「俺は二乃を助けただけだ」

「ん？ 二乃その傷」

「あゝ、この傷は・・・」

「そういうことか」

二乃が柵にぶつかった。そして柵から本が落ちた。

落ちようとなつてたことに風太郎が気づく。

そして本が落ちる時風太郎が守った。

簡単な問題じゃねえか。

「柵から落ちた本から二乃を守った？」

「よく見ればそうとも受け取れますが違いますか？」

「そ。そうだ」

ビンゴおっく。やっぱ楽しいわ。

このゲーム。

「何解決したみたいなき感じになってるの？ 適当なこと言わないで」

「二乃しつこい」

「あんたねえ」

「まあまあ。そうカツカしないで」

【私達昔は仲良し五姉妹だったじゃん】

「昔はって。私は」

そう言い残すと彼女は部屋から出ていった。

「おい。出ていったが良いのか？」

【ほっとけば良いよ】

「皆さんお久しぶりです」

「由香さんまで。どうして？」

「一花さん、三玖さんさっきのは言いすぎじゃないですか？」

「え？」

「二乃さんは家庭教師にくる上杉さんのことを

部外者だとおっしゃってました」

「!？」

「昔は仲良し五姉妹って、おっしゃってましたが

二乃さん本人は一番姉妹のことが好きなんじゃないですか？」

「……」

俺もそう思った。

あの言い方で全て分かった。

二乃は誰よりも姉妹のことが好きだということをして……

「てか、なんで家に勝手に入れるの？」

「ほんとだよ、ほんとなら不法侵入だからね」

「お前から不法侵入と言う言葉がでるとわな」

「で？なんでなの？」

「言って良いか？由香さん」

「良いと思いますよ」

「え？」
「え？」

【俺の名前本当は中野悠真なんだ】

「え?」

「え?」

「冗談ですよね?」

「冗談でもなんでもない」

そう。俺の本当の名前は中野悠真。

母親が死んだ時。

母の死が受け入れられなかった

俺は母方の名字を名乗ることに決めた。

悠真は、父親に電話をした。

「もしもし、父さん」

「何だ?悠真」

「俺が父さんの息子であることを喋った」

「そうか」

「何も驚かないんだな」

「いずれ分かると思っていたことだ。

いつ分かるうが別に良いだろ」

「はい。そうですね」

「娘達はそこにいるのかい？」

「はい。居ます」

「なら伝えてほしい」

「何を？」

俺はスピーカーをオンにした。

「彼の言っていることは本当だ。

彼は正真正銘私の息子だ」

そういつた父さんは電話を切った。

沈黙の時間が続いた。

「私達のお兄さん」

「なんですか？」

「嗚呼。そういうことになるな」

「風太郎すまん。今まで黙っていて。

長年の付き合いなのに・・・」

「嗚呼。氣にするな」

ガチャ。

ドアが開いた。

「今言っていたことは本当なのね」

「に、二乃」

「嗚呼。そうだ」

「これから」

【お兄様と呼ぶわ。覚悟しててねゆう君】

「あ。嗚呼」

「あの目、本気だ」

「やっぱ二乃の好きな人って」

「呼び方も変わってた」

「悠真さんこれからこの家に住むんですか？」

「いや、それはない」

「即答!!」

「兄妹なんだし良いよね？」

「お前ら忘れるな”義”だから」

「別に良いわよね」

「ゆう君に拒否権ないから」

「ゆ、由香さん Help me!!」

「まあ。良いじゃないですか悠真様」

「てか、あんたいつまでいるの？」

「え？俺？」

「家庭教師終わったんなら帰った帰った」

「ちよ。風太郎助け」

「頑張れ!!」

「えええ」

風太郎は由香さんと共に中野家のマンションを後にした。
風太郎は由香さんに家まで送ってもらった。

「お兄ちゃんおかえり。え？」

「どうした？らいは」

「お母さんお兄ちゃんに春が来ました」

「おーい。悠真のお手伝いさんだから」

「やっぱり〜そうだよね」

「・・・」

「あのお兄ちゃんに彼女とかできそうにないしね」

「らいはさん、そこまでいわれると俺泣いちゃいますよ？」

「元気だして、今日はお兄ちゃんの好きなカレーうどんだよ」

「嗚呼。いつもありがとな。らいは」

「うん。じゃあ私先に入ってるね」

「由香さんありがとうございました。またお願いします」

「はい、良い妹さんですね」

「そうですね」

風太郎と別れた由香さんと言うと・・・

「悠真様を向かいに行きますか」

そう言った由香さんはもう一度

五つ子のいるマンションへ向かうのであった。

次回 第7話 今日はお休み

第7話 今日はお休み

第7話 今日はお休み

「うーん、此処は何処だ？」

「悠真様おはようございます」

「由香さん？なんで俺は自分の家にいるんですか？」

「昨日あの後五つ子さんの家に迎えに行っただけですけど。」

「そこまでは覚えてますか？」

「うん。覚えているよ」

「そうか、俺由香さんの車で寝ちやっただのか……」

「そして、家に着いたが、反応が無かったから、」

「俺を部屋まで運んでくれたんだ。」

「俺を部屋まで運んでくれてありがとう、由香さん」

「ええ」

「じゃ、シャワー浴びてくるわ」

「はー」

そう言うなり、俺はシャワー室へと向かった。

俺はシャワー室へ向かう時に思った。今日は日曜日ということもありゆつくりアニメ鑑賞や漫画を買ってきたりすること出来るつと。

「今日はなんていい日だ」

そんなことを呟いたその時、ピンポン、と玄関のチャイムが鳴る。

これからシャワーを浴びようと思っていた時に、だ。

「誰だ、俺の休日ルーティンを邪魔するやつは」

「……私が出てきます」

「よつろしくー!」

宅配業者だったらぶつ飛ばす。

そんなことを考えながら、俺はシャワー室に入る。

そして、由香さんがインターホンに出てくれた。

「悠真様、二乃さんでした」

「ええ？ちよとまった！俺が出る」

「はいはい。分かりましたよ」

俺は急いで着替えて玄関へと向かった。

ドアを開けるとそこには二乃の姿があった。

「よ、よおどうしたんだ？二乃？」

「ゆう君に給料を渡しに来たの」

「ええ？何故俺に直接渡さない、親父」

「まあ、此処でやるのも何だし、中に入って」

「分かったわ」

「どうかしたか？凄い嬉しそうだけど」

「なんでもないわ」

「ほんとに大丈夫か？」

「ええ」

俺の部屋に二乃を案内した。

「これがお父さんから預かった給料よ」

俺は封筒の中を見た。

「諭吉さんが五枚も」

「悠馬様、良かったですね」

俺そんなに家庭教師したつけ。

諭吉さんが五枚ももらえるほど・・・

「受け取れねえ」

「え？なんで？」

受け取れない、五万円も俺は何も出来なかった。

勉強風太郎馬鹿もきつとそう言うはずだ。

「俺は何もやっちゃいない、2回お前らの家に行ったが、

俺は何も出来なかった」

「取り敢えず、返金は受け付けないわ。」

もし、いらぬのなら募金でもしてなさい」

「わざわざ家までサンキューな」

「ええ」

給料もらう際、悠真はこんなことを考えてた。

これだけお金があれば、○娘のゲームに課金、

色んなことが出来るぞっと。

「私そろそろ帰るね」

「分かった。じゃあな二乃」

「うん」

二乃と別れた後、俺は、部屋に戻った。

その後しばらくしてスマホニュースを見てみると、
あることに気づいた。

「へえ〜。今日花火祭りがあるのか……」

「由香さんを誘って行くかな」

部屋を出た俺は、由香さんの元へと向かった。

「由香さん」

「どうしたんですか？悠真さん」

「たまには仕事忘れて何処か行きたいと思いませんか？」

「私は、悠真さんと喋るのが好きなので、」

『仕事を休みたい』、『忘れたい』なんて思ったことないですよ
くそ、完全に詰んだ。

由香さんを誘って花火祭りに行こうと思ったのに・・・

「由香さんに言いたいことがあります」

「え？」

そう、俺の目的はただ一つ。

由香さんをこの祭りに誘うことだ。

「一緒に花火祭りに行きたいです」

「私も行きたい」

「じゃあ、準備でもしましょうか」

「ええ」

悠真と由香さんは、祭りに行く準備をした。

俺は服を着替えた。

「由香さん浴衣綺麗で可愛いです」

「悠真様有難うございます」

俺は思った。やばい、由香さんめちやくちや可愛い。惚れちやいそうつと。

『やはり、俺のお手伝ユカいさんはめちやくちや可愛い』

俺の由香さんってやばいな俺。

カレカノじゃないんだし・・・

俺が好きなアニメ、やはり俺の○ラブコメは間違っている。を少し変えただけなのに、俺少しキモいかな。

「それじゃあ、行きましょか」

「はい」

由香さんと俺は祭りの会場へと向かった。

その途中・・・

「あ。ゆう君。ゆう君も行くの？祭り」

「嗚呼」

「私達も行くところよ。一緒に行きましよう」

「え？俺は由香さんと・・・」

「一緒にいくの？」

「はいはい。分かりましたよ」

五つ子達と一緒に向かつてる途中。

風太郎と出会った。

「お！悠真じゃん」

「おー。風太郎」

「なあ、聞いてくれよ」

「ん？」

何が言いたいんだろ？

どうせ勉強馬鹿風太郎のことだ。

ろくなこと言わないんだろな。

例えば、花火祭り行くより、勉強しとけば良かったとか。

取り敢えず、あいつのことだ。

勉強のこと以外絶対に言わないだろう。

そう思っていると。

「お前からこの前だした宿題は終わってるんだらうな」

ほら。やっぱり、あいつが勉強のこと以外で喋ることはないんだよ。

しかし、妹ちゃんめちやくちや可愛いな。

「あー悠真さんだ、隣は彼女さん？」

「いや、由香さんはお手伝いさんだ」

「そうなんだ。そうだ、二人とも今から一緒に祭りに行く」

うん。あの風太郎が可愛いって言うだけあるな。

めちやくちや可愛いじゃねーか。

これは行くしかない。

「おい。まてまだ宿題終わってないんだろ？」

「ダメなの？」

「……もちろん良いとも！楽しもうならいは」

この重度のシスコン馬鹿は……

どうしたら良いんかね。

将来こいつに結婚出来るとは思えないな。

「つて、何で家で勉強してんのよ」

「お前らが宿題やってないからだろ？」

うん、そうかもだけどさ俺らもいる必要あるの？

俺、由香さんと花火見たかったんだけど・・・

このくそ勉強馬鹿鼠太郎この恨みはでかいからな。

「良いなあ。妹ちゃん由香さんと今一緒かあ」

「お前も一応家庭教師だからな」

はいはい、分かっていますよ。

俺は家庭教師ですよ。

くそ、楽しい、楽しい一時が宿題してないこいつらのせい・・・

30分後・・・

「やっと終わった！」

そうですね。やっと終わりましたね。

俺、疲れちゃいましたよ。

「じゃあそろそろ行きましようか」

「花火何時からでしたっけ」

「19時30分から20時30分です」

「じゃあ、早く行きましよう」

「[[[[[[おー！]]]]」

俺、由香さんと見たかったんだけど・・・

そう思いながら俺は五つ子達、

風太郎と共に祭り会場へ向かったのであった。

次回 第8話 今日はお休み②